

天正遣欧使節とポーランド

— 隠された絆

リュドミール・M・エルマコーワ

はじめに

本稿の目的は、ある偶然をきっかけにして発見されることになった一つの歴史的資料について報告することである。四〇〇年の歳月にわたって、ヨーロッパのある大学図書館の書庫に眠りつづけていたこの資料は、日本人とポーランド人の最初の出会いを証明する貴重なものだと考えられる。資料の発見の経緯については、本稿の最後に述べることにして、ここではとりあえず、この資料に関する簡略な説明を与えることから始めていきたい。

今回発見されたのは、一五八二年に長崎から出帆しヴァチカンを訪ねローマ教皇の謁見を賜った天正遣欧使節一行の一人による自筆の文書である。この文書は、赤い紙に十六世紀のスタイルで書かれた書であり、そこには旧約聖書の詩篇からとられた二つのダビデの

聖歌の一部がラテン語と日本語両方で記されている。そして、この日本語は一人のポーランド人ベルナルド・マチェヨフスキの依頼によって、遣欧使節の一人が翻訳したものである事がわかっている。

ではマチェヨフスキなるこのポーランド人は、いかなる人物かということであるが、彼はカトリックの聖職者で後には枢機卿に選出されることになる高名な宗教学家である。そして天正遣欧使節がローマに滞在していた一五八五年には、彼もまたポーランド国王の使者としてローマに滞在していたのである。つまり、ローマという場所、このポーランド人は遣欧使節の少年たちと出会ったのである。翌年の一五八六年、マチェヨフスキはポーランドへ帰国する事になるが、その際にダビデの聖歌を記したこの書を持ち帰る事を忘れなかった。そして一五九九年にはこの書はマチェヨフスキの命によって彼のイニシャルと紋章をあしらった銀製の額におさめられ

ラクフ・アカデミーへ寄贈されている。それから四〇〇年ものあいだこの書は人の目に触れられる事もなく、図書館の書庫の片隅で保管される事になった。そして二〇〇〇年二月、九州の天草で、ポーランド語で書かれた一枚のメモが展示されていなければ、この日本人とポーランド人との接触の記録は、さらに長いあいだ歴史の闇に取り残されたままであったろう。

以下では、この偶然に発見された資料の成立に関係した人物、そしてその舞台となった四〇〇年前の日本、ヴァチカン、ポーランドの歴史的な状況について述べていく。

日本、九州

十六世紀というのはイエズス会の本格的な布教活動の始まりの世紀である。この壮大なプロジェクトはカトリックの教えをヨーロッパのみならず、東洋の国々へと布教し、世界全体を覆うことを目的としていた。

イグナチウス・ロヨラによって一五三四年に創立されたイエズス会は、一五四〇年にローマ教皇により修道会として公式に認可されると、まもなく反宗教改革の基盤と呼ばれるほどの権力や影響力をもつにいたった。イエズス会はとりわけ国家統治への強い関心を持っており、布教活動をつうじて社会の様々な領域へと手を伸ばしていった。そうした彼らの活動の根本にあったのは改宗運動（プロセ

リテイズム）と教育であり、そのために現地語による宣教と告解を重視した。

イエズス会は創立後まもなく、強力な教育機関へと発展していくことになるが、布教活動の中心に教育を据えるこの方針は、宗教改革運動から取り入れられた多くの側面のひとつである。ちなみに、成績制度をはじめとした現在の一般的な教育機構を支えている教育原理はその当時の産物である。また無料教育もイエズス会の活動に由来している。イエズス会のもうひとつの取り組みはエリート養成を目的とした上流階級の子息の教育であった¹⁾。

布教活動において教育を重視するこの方針は、イエズス会が布教事業を推し進めたすべての活動地域に見出すことができる。たとえば、一つのミッションによって九州や本州西部において神学校の開校が行なわれると同時に、もう一つのミッションはドイツ、ポーランドやリトアニアで影響圏の拡大を図っていたのである。

同じようにヴァチカンの指示に基づいて一五七七年に創立されたギリシアのアファナシー神学校で修行するために西ロシアから教人の男子の募集が行なわれた。そのときの応募資格は「適法な結婚で生まれ、ギリシア正教の伝統で教育された十二歳から十八歳の男子で、性格がよく、学業に相応しい知性を持ち、また修行が終わった後で故郷に戻りたくなるように、親戚を有するもの²⁾」であった。

イエズス会の布教活動にとって最大の障害は、言うまでもなく、

現地の在来の宗教、ヨーロッパにおいてはプロテスタントそしてギリシア正教、日本においては仏教の諸宗派やさまざまな民間信仰であったが、イエズス会士たちは、セミナリオやコレジオを各地に設置し、布教活動をつうじて宗教生活の全体を独占しようとした。

日本への最初のキリスト教の伝道は、よく知られているように、一五四九年に日本を訪れたイエズス会士フランシスコ・ザビエルによるものである。ザビエル神父をはじめとした宣教師たちの精力的な布教活動は、この国においてまもなく多くのキリスト教信者を獲得することになる。イエズス会士によるこの布教活動の成功の背景には、歴史的、政治的、また経済的な要因が存在したことも確かであるが、一方でザビエルという人物の魅力や彼と共に来日した宣教師たちの熱狂的な努力を軽視する事はできないであろう。宣教師たちは日本語を身に付け、神学校や印刷所を設立し、宗教の範囲を超えて日本文化の様々な領域へと深く影響を与えたのである。当時の日本を實質上統治していた織田信長はイエズス会士らの活動に大変興味を示し、仏教の僧侶とキリスト教宣教師が語り合う宗教討論を京都で開いたほどである。ある推計によると、一五八〇年には国内の教会堂の数は二百を数え、またカトリックへの改宗者の数は数万にものぼったといわれている。

一五八二年一月、日本での布教活動の様子を視察にきていたイエ

ズス会巡察師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノは、九州の三人のクリシタン大名、すなわち大友宗麟（洗礼名フランシスコ）、有馬晴信（プロタジオ）、そして大村純忠（バルトロメオ）の援助のもとに遣欧使節を計画している。この使節の目的の一つにはヨーロッパのすぐれた文物に日本人を触れさせて、日本人のキリスト教世界観を一変させることにあったが、同時にまた、イエズス会による日本での布教活動の成果をローマ教皇をはじめとしたヨーロッパのキリスト教世界に報告するためのものでもあった。もちろん、両方ともに政治的、経済的な意図も持っていた。

遣欧使節に選ばれたのは有馬セミナリオで教育を受けていた十二から十三歳の教養ある四人の少年、伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノである。彼らは、ヴァリニャーノ神父に随伴され、一五八二年二月二十日に長崎から出航した。太平洋、インド洋、そして大西洋にまたがる航海の途上で、彼らはマカオ、ゴア、モザンビークに立ち寄っている。アフリカ大陸は喜望峰へと迂回し、サンタ・エレナ島を経て、一五八四年八月十日ポルトガルのリスボンに到着した。さらに一行はイヴェリア半島をグアダルーベからトレード、マドリード、そしてベルモンテと陸路で横断し、地中海に面したスペインの町アリカンテへ向かう。アリカンテからイタリアのリヴォルノ港行きの船に乗り込んだのは一五八五年二月七日のことであった。地中海では途中マヨルカ島を経由し、同年三

月一日にイタリアのリヴォルノへ上陸。ピサ、フィレンツェそしてシエナといったイタリアの町々を巡り、一五八五年三月二十二日ついにローマに到着した。³九州を出発してから、実に三年を越す歳月が経っていた。

ローマ、ヴァチカン

遣欧使節がローマへ到着した時代は、教皇グレゴリウス十三世による、カトリック教会の改革の時代であった。グレゴリウス十三世が教皇に選出されたのは、一五七二年のことであるが、彼は、トレント公会議（一五四五—一五六三）によって提唱されたカトリックのテーゼを実現すべく教会改革の推進に力を注いだ。ちなみに、この公会議においてカトリックのテーゼは現代のそれに近い形で提唱され、プロテスタントと一線を画したことが良く知られている。

ローマ教皇となったグレゴリウス十三世は、改宗運動やイエズス会の教育機関の設立を重視していた。ローマのみならず、英国のドナイとスコットランドのボンアムソンにはコレジオが設立され、グラーツ、ウィーン、プラハ、アウスブルグ、ミラノ、その他のいくつかのヨーロッパの都市には、彼によって設立された、あるいは彼によって維持されたセミナリオが存在していた。また、日本でも三つの神学校が開設されている。

教皇グレゴリウス十三世は、その十三年の在位期間に、ローマ市

内に二十三ものコレジオ付属のグレゴリアン校を設立し、またコレジオ自体にたいしても経済的な援助を与えていた。宣教活動や各々の布教地域での教育もそれまでにはいほど拡大され、例えばロシアのイワン四世に対してまでもカトリックへの改宗を迫ったほどである。⁴

ところで、一五八五年三月二十二日にローマに到着した遣欧使節たちは、イエズス会本部に宿泊した。翌二十三日にはさっそくヴァチカン宮廷内の「帝王の間」において教皇グレゴリウス十三世の謁見を賜る。そして四月三日には、織田信長からの贈り物として豪華な屏風を教皇に献上した。しかしながら、その七日後の四月十日に高齢の教皇は息を引き取った。四月二十五日に、グレゴリウス十三世の跡を継いでシクストゥス五世が教皇に選出されると、翌日さっそく遣欧使節は新しい教皇の謁見を賜った。また五月一日に遣欧使節はシクストゥス五世の戴冠式に参列している。さらに同月十一日にはローマ市民会で遣欧使節に対するローマ市民権が認められ、二十九日にローマ市民会へ招待された使節たちへローマ市民権証書が授与され、ローマの貴族の地位を与えられた。これらが遣欧使節のローマでの短い滞在中の主な出来事である。同年五月二十六日に、使節たちは、教皇から、大友、有馬、大村侯への返書を拝受している。六月二日に教皇のもとへ別離の挨拶に伺い、その翌日にローマを発ったのである。彼らは、ペルージャ、ロレート、ヴェネチア、

ミラノ、ジェノヴァ、バルセロナ、モンセラート、モンソンといったイタリアやスペインの町を訪れリスボン港から日本を目指して出帆したのである⁽⁵⁾。

日本の遣欧使節の訪問の報せは、ヴァチカンやローマのみならず、ヨーロッパ全土にまたたくまに広まっていた。ヴェネチア大統領は、当時の著名な画家ティントレットに彼らの肖像画（現在未発見）の作成を依頼している。ヴァチカン訪問中の日本人を描く書物、四人の少年使節それぞれの銅版画による肖像画が、ヨーロッパ全土で発行され始めた。そして、十六世紀から十八世紀にかけて出版された日本に関する多くの書物にこの訪問の記述が掲載された。

イタリアでは、日本の少年使節の来訪の情報を人々にすばやく伝えたのは、十六世紀特有の小さな冊子、つまり *cinquocentina* と呼ばれる現代の新聞のような出版物であった。イタリア人研究者 A. Boscaro によれば、当時出版された遣欧使節の来訪を知らせる冊子は七十八種類にもなっており、そのうちの四十九冊は訪問の年である一五八五年に出版されている。

それらの冊子のなかで、おそらく最初のものは *Lettera annale Portata di Novo dal Giappone Da i Signori Ambasciatori Delle cose ivi successe l'anno MDLXXXII*, in Venetia, Appresso I Gioliti. M.D. LXXXV⁽⁶⁾ であるが、そこには日本からの使節がまもなく来訪する旨が報じられている。その後大量に出版された冊子の

多くは一五八五年三月二十三日に行われた教皇グレゴリウス十三世の謁見を報告した「*Acta Consistorii Pvblice Exhibite A.S.D.N. Gregorio Papa XIII. Regvm Iaponiorvm Legatis Romae, Die XXXIII. Martij. M.D. LXXXV. Ex Auctoritate Superiorvm. Romae, Apud Franciscum Zanetum. M. D.LXXXV*」からの転載であった。また、教皇グレゴリウス十三世の死後には『短い報告』という教皇シクストゥス五世の謁見に関する冊子が出版されている。遣欧使節に関する出版物はイタリア国内ばかりではなく、ヨーロッパ全土において数多く出版された。イタリアの *cinquocentina* もイタリア語およびラテン語からいくつものヨーロッパ諸国の言語へと翻訳されている⁽⁶⁾。これらの冊子の数は実に膨大なものになるが、それらの中で、ここではただ一つのものに注目したい。それは *Iapaniorm Regvm Legatio, Romae coram summo Pontifice, Gregorio XIII. Martij, habita: anno 1585. Addita etiam est brevis in calce descriptio Insulae Iaponicae* という冊子であるが、これは *Acta Consistorii* の情報に、オルテリウスの『日本列島の簡略描写 (*Brevis Descriptio Insulae Iaponicae*)』から引用された日本に関するわずか一面にも満たない記述が付け加えられたものである。この冊子が、私たちがここでとりわけ興味深いのは、その奥付に記された出版された土地の地名である。そこには次のように書かれている。 *Romae, apud Franciscum Zanetum, Et Bononiae, apud*

Domini, 1585. つまりこの冊子はローマとポーニアと同時に、当時のポーランド共和国の首都であったクラクフでも出版されたことがわかる。ちなみにOfficina Lazariとはクラクフに存在したポーランドの最も古い出版社の一つである。

また、ポーランドで出版されたもう一つの遣欧使節に関する出版物は現在のリトアニアの首都であるヴィリニウス（当時の名称はヴイリノ市で、ポーランド共和国の統治下にあった^⑩）で出版されたものであるが、そこでも記述はActa Consistorii^⑪からの借用である。

このように、未知の世界から訪れた遣欧使節に関する情報は、ヨーロッパとほとんど同時に、ポーランドへも伝わっていたことになる。

こういった遣欧使節に関する石版印刷に彩られた冊子の大量な出版の勢いは、一五八六年にグイード・グワルチェリの『遣欧使節の報告・イタリア来訪からリスボン出航まで』^⑫という書物の出版を契機にとたんに衰えることになる。この書物は、遣欧使節の来欧から、イタリア滞在、そして翌年のリスボン港からの出航まで、つまりヨーロッパ滞在期間を包括的に記述しているため、これ以降の書物の大半は『遣欧使節の報告』からの翻訳、あるいはこの書物への参照という形をとったのである。念のために書いておけば、グワルチェリのこの書物については、今回の筆者の文書の発見とも直接の関係があるため、後でまた触れることになる。

ローマ訪問中の使節たちの報せはロシアへもさまざまな翻訳を通じて伝わっている。そうしたものの一つに、次の記述を見ることが出来る。「この宮廷は、日本からの使節たちを、最大級のもてなしをもって迎えた。これまでにカピトリオが丘を訪れた使節がこれほどまで盛大な歓迎を受けたことはなかったであろう。教皇は彼らを抱きながら、感動のあまりその頬を涙で濡らした」^⑬。

確かに教皇グレゴリウス十三世にとって遣欧使節の訪問が長年の努力の成果だったことを考えれば、彼の感動も不思議ではないだろう。

日本の遣欧使節が教皇の宮廷に到着したのは、彼の人生最後の年最後の月であった。彼らの訪問は教皇グレゴリウス十三世の人生におけるもっとも重要な出来事、ある意味では最後の達成というふうに考えられよう。現代のカトリック教電子百科事典は、教皇グレゴリウス十三世の伝記的記述の中で、「彼の教皇在位期間で一番幸せな瞬間は疑いもなく一五八五年三月二十二日の遣欧使節の来訪であり、彼らはへ……日本にキリスト教の教えを伝えるために宣教師を送った教皇の父のような気遣いのお礼にローマを訪れた」と書いている。

この旅ははじめから終わりまで八年半もかかっている。彼らがローマを発った後、この町はシクストゥス五世による思い切った改革の時代へと進んでいく。次々と新しい様式の建造物が建てられ、ロ

ローマはバロック的な都市へと変貌していった。またそれと同時に、教皇の権力は日ごとに増していったのである。一方日本はといえば、イエズス会士たちを擁護してきた織田信長は遣欧使節が長崎を出発した四ヶ月後に殺害され、天下統一をはたした豊臣秀吉によるキリシタン弾圧の時代がはじまったのである。

ポーランド共和国

このように、一五八五年の春から夏にかけて、遣欧使節の四人の少年はローマに滞在している。そして、彼らは、この地において、いつのことかははっきりしないがこの二ヶ月の滞在のあいだにポーランド人の聖職者ベルナルド・マチェヨフスキーと出会ったことになる。今回筆者が見つけた文書は、この出会いから生み出されたものである。

それでは、マチェヨフスキーとはいったいどういった人物だったのか。

ここではまず、彼がポーランドのみならず、ヨーロッパ文化のさまざまな分野へ大きな影響を与えた重要な人物の一人であるということを確認しておくべきであろう。

ベルナルド・マチェヨフスキー¹³は一五四八年に東ポーランドのルブリン市で生まれている。ルブリン市は歴史の長い町で、ポーランドでもっとも古い教会（九八六年建立）の一つはこの町にある。ま

た、ルブリン城は一一一五年に起源をもつといわれ、町へ侵入したモンゴル軍によって一度破壊されたのである。マチェヨフスキーはルブリン城の城代の息子として生まれ、家庭教育を受けた後、ウィーンのイエズス会神学校で勉強した。ジグムンド・アウグスト王の君臨中（一五四八―一五七二）の一五七〇年に、マチェヨフスキーは宮廷の少尉として職を得る。子供のいなかったジグムンドの死後、ポーランドの政治体制は選挙王制に変わり、ヘンリク・ヴァレジイが即位する。しかし彼は戴冠式を挙げてからわずか四ヶ月後に、フランス王位の座を求めて、ポーランドを去ってしまった。新たな国王選挙によって、ポーランド国王の空白の座を埋めたのはトランシルヴァニア公ステファン・バトリーリである。マチェヨフスキーは、この若き国王と親しくなり、リヴォニア戦争¹⁴の一連の戦闘に参加し、自らも一部隊を提供するまでに至っている。彼は一五七九年から一五八一年にかけてこの戦闘に参加した。

この時に彼はイエズス会士ピョートル・スカルガとスタニスラウス・ホシウス¹⁵との親交を深め、彼らの説教に感化され、兵役から退き、ボリスウアフ市長の職を辞め、聖職者への道を選んだ。マチェヨフスキーは自分の財産をすべてルブリンのイエズス会に寄付し、一五八二年には神学を学ぶためにペルージャ、そしてローマに赴いた。ローマでマチェヨフスキーは正式に聖職者の地位を得ることになる。遣欧使節がローマを訪れた翌年の一五八六年に彼はポーラン

ドに帰国した。

ステファン・バトリー国王の死後、ポーランドの国王選挙が始まる。マチェヨフスキーはジグムント三世ヴァーサを支援し、彼が一五八八年に即位した後、マチェヨフスキーはルーツクそしてブレストの司教に任命される⁽¹⁸⁾。熱狂的な改革者、熱狂的なイエズス会士だった彼はよく自分の管轄の司教区を訪れ、司教会を開催した。一五九一年に彼の活躍を高く評価した王がマチェヨフスキーをヴィリノ司教に任命するが、リトアニア大公国の大法官サビエハ⁽¹⁹⁾がリトアニア人を希望したため、却下される。一六〇〇年に教皇自身の任命で、クラクフ司教となったマチェヨフスキーは、ポーランドの神父のために書かれた最初の教本である、有名な*List pastercki* (「神父の手紙」⁽²⁰⁾)を出版した。当時の多くの司教と同様に、マチェヨフスキーは聖職者としての役割を務めながらも政治的活動にも関わり、ローマ滞在期間には、ポーランド国王の使者としてふるまったようである。また一六〇三年に教皇クリメンス八世から*Sancti Ioannis ante Portam Latinam*の称号を授けられ、枢機卿に任命される。さらに一六〇六年七月三十一日に彼はグニェズノ市の首座大司教(「プリマス」)となり、ポーランドのカトリック教聖職世界で最高の地位を占めることになる。

マチェヨフスキーの活躍していた時代に聖イオアン洗礼者大聖堂や聖イオアン福音書記者大聖堂が建てられた。またポーランド最初

のカマリドリア会の修道院もこの時に建設が始められている。一六〇二年に彼はクラクフに神学校を開設した。また、奇跡に関するいくつかの伝説がマチェヨフスキーの名と結びつけられることになった。例えば、彼が重病の際に聖クニグンダ(キング)のミイラの方へ巡礼することによって、病気が完治したという物語が、クニグンダ崇拜の拡大につながったという⁽²¹⁾。彼が、偽ドミートリーの代理の男とマリナ・ムニシエクの結婚式で神父の役割をも果たした⁽²²⁾。また現在の歴史学や美学の領域ではいわゆる「マチェヨフスキーの聖書」が注目を浴びている。この壮麗な装飾がほどこされた聖書は十三世紀のもので、マチェヨフスキーがペルシアのアッバス・シャーにこれを送ったという⁽²³⁾。

マチェヨフスキーがこの世を去ったのは一六〇八年のことである。ポーランドにおける教皇の大使、教皇の遣外使節、司教の称号も有していたほどに彼の権力がましたのだ。彼の眠る墓はクラクフのバベル城の教会に、イェジ・ラジヴィウ司教、ピョートル・スカルガヤスタニスラウス・ホシウスといった偉大な宗教家たちと並んでいる。おそらく、マチェヨフスキーは当時のもっとも優れたカトリック教の活動家と呼ばれるに相応しい。つい最近ポーランドを訪れたヨハネス・パウルス二世もクラクフで行われた説教⁽²⁴⁾のなかで、ポーランド教会史だけでなく、ポーランドの国の歴史、文化的記憶に残る聖職者としてマチェヨフスキーの名を挙げていたほどである。

マチェヨフスキーの及ぼした影響はポーランドだけには限らない。彼の名は、様々な批判にさらされながらも、ロシア、ベラルーシ、ウクライナやリトアニアの研究に頻繁に登場している。その理由は疑いもなく、彼の人生を貫く一つの運動——東方帰一教会 (Unit) との関わりにある。東方帰一教会とはギリシア正教とカトリック教の同盟で、ウクライナ、ベラルーシや西ロシアのいくつかの地域のギリシア正教徒とカトリック教徒を一つの信仰形態にまとめたものである。東方帰一教会に所属したギリシア正教徒は以前の典礼を根本的に保ちながら、ローマ教皇の管轄に入った。クリメントス八世が一五九五年十二月二十三日の布告で明言するように、東方帰一教会の成功にはマチェヨフスキーの努力が欠かせなかった。

この東方帰一教会の複雑な歴史は神学的にも、政治的にも、歴史的にもきわめて錯綜しており、ここでその詳細を述べることはできない。ただマチェヨフスキーに関してだけ言えば、彼の合同の実現へむけられた活躍は多くの書物にも取上げられ、カトリック界の聖職者や信者のみならず、ギリシア正教徒までもが、マチェヨフスキーを穏健な政治家として、また出来るかぎり協調を重んじる聖職者として認めている。

東方帰一教会は一五九六年十月八日のプレスト宣言で正式に発足した。この宣言にキエフ府主教、その他の数人のギリシア正教主教が署名し、ローマ・カトリック教との合同、自分自身をローマ教皇

の管轄下におくことを確認したのである。もちろんこの宣言にはマチェヨフスキーも「聖なるクリメントス教皇の代表者、マチェヨフスキー聖神父」として言及されている。またマチェヨフスキーの自筆による数通の手紙がこれまでに発見されており、その文通相手にはピョートル・スカルガ、ローマ教皇がポーランドに派遣した教皇大使、ナポリのアニバル大司教、そしてヴァチカンのローマ教皇が含まれている。

以上が、ローマで遣欧使節たちに出会い、彼らに聖書からとられた二つのダビデの聖歌の和訳を依頼したポーランド人、ベルナルド・マチェヨフスキーの生涯に関する簡単な記述である。彼が神学を学ぶために滞在したローマで、遣欧使節と出会ったのはたしかであり、おそらくポーランドへと帰国する際に、ローマ滞在中に収集したたくさんの書物といっしょに問題の文書を持ち帰ったのであろう。そして、一五九九年に彼はこの文書をクラクフ・アカデミーに寄付をしている。そしてこの資料は、そのまま永い眠りに就くことになった。

遣欧使節の一人による自筆文書

歴史的資料の発見の経緯とは、科学的探究にとつては単なる挿話に過ぎないのかもしれない。だがここでは、この幸運や偶然に満ちたきわめて興味深い出来事について記述しておきたい。

二〇〇〇年二月のこと、筆者はY M C Aが企画した団体旅行に参加して天草諸島を訪れた。旅行の目的は、日本におけるイエズス会の活動の名残を見ることや、隠れキリシタンの歴史に接することなどであった。ルートの途中で天草コレジオ館にも立ち寄った。

このイエズス会のコレジオは、一五九一年から六年間天草に開校され、ラテン語教育や「天草本」（天草版）と呼ばれている一連の活版印刷本出版などの活動によって、南蛮文化の中核となっていたのであるが、まさにその同じ場所に天草コレジオ館が建てられている。

さて、展示のなかでガラスの箱に入ったイタリア語の本があった。その本は前述の一五八六年にローマで出版されたグイド・グワルチエリの『遣欧使節の報告・イタリア来訪からリスボン出航まで』であった。その本は『日本遣欧使者記』の書名のもとに、木下杢太郎の翻訳による日本語版が、一九三三年に東京で出版されている^⑧。そして、その十六世紀のイタリア語の本に見惚れていた私は、偶然にその本のすぐ前に小さな紙切れが置かれているのに気がついた。それは何かのメモのようであり、また意外なことにそこにはポーランド語で何か書かれていたのである。

このポーランド語のメモがこのコレジオ館にいつ、どのようにして収められ、そしてイエズス会と日本のキリシタンとどういう関係にあるのかと、不思議に思った私は、館長の川崎富人氏や案内の労

を執って下さった天草・日本ポルトガル協合理事御崎求氏に尋ねると、次のような説明が返ってきた。「もともと、木下杢太郎の初版本があったので、たまたま天草コレジオ館を開館した一九九〇年にイタリア語版の原書があることを、東京神田の古書店の図書目録で知り、原本を購入しました。高価な買い物でしたが、何しろオリジナルが少なかつたものですから。このイタリアの原書と杢太郎の和訳の初版本と合わせて見てもえたらという考えでした。例のメモは原書の羊皮の表紙と扉紙の間に折り込んでありました。初めはポーランド語を解するものがないため、その内容もわからずメモは折り込んだまま原書のみを展示していたのですが、後で解らなくても良いから、原書の前に展示しようということになったのです」。メモの内容を、未だだれも読んでいなかったということで、ポーランド語とポーランド文学に以前から興味程度に親しんでいた私はその内容を見ると、さらに驚かされることになった。それは以下の通りである。

「これは、聖書からとられた二つの断片の和訳である。教皇グレゴリウス十三世のもとへ派遣された日本人の使節たちは、ローマに派遣されたポーランド国王の使者ベルナルド・マチェヨフスキーの依頼により、一五八五年ローマに於いて、この翻訳をした。この翻訳は『大いなる慈悲の印としてクラクフ・アカデミーの図書館へ』、先述のルーツク司教ベルナルド・マチェヨフスキーによって一五九

Przekład japoński dwu cytatów z pisma św., napisany na prośbę Bernarda Maciejowskiego, pisma królewskiego przy Stolicy Apostolskiej, przez pośredwo japońskich do Grzegorza XIII papieża, w Rzymie 1585 r. — darował „na znak wielkiej swej miłości dla Biblioteki Uniwersyteckiej krakowskiej” tenże Bernard Maciejowski Biskup Lucki w r. 1599. —

図1 グイード・グワルチエルのイタリア語版原書にはさまっていたメモ

九年に寄付された」(図1)。

つまり、このメモによると、使節の一人は一五八五年にローマで、聖書からとられた二節を日本語に訳しており、おそらくマチェヨフスキーがその和訳をおそらくマチェヨフスキーがその和訳を、他の書物(グワルチエリの本を含む)や書類とともに、イタリアからポーランドに持ち帰って、「クラクフ・アカデミー」に寄付したのである。問題のメモはどこかの司書が図書館に所蔵されている例の和訳に関する説明を記録するために書き付けておいたものに相違ないであろうと私は考えた。このメモが書かれた時代については判断しがたいのであるが、おそらく十九世紀末から二十世紀初頭ではなかったかと推測される。

天正遣欧使節関連資料を調べ始めたが、そのなかにこの逸話に触れたものはなく、このような逸話が天正遣欧使節の歴史において全く新しい事実であ

ることが分かった。そこで、マチェヨフスキー司教の依頼で十六世紀にローマで少年使節が書いた二節の翻訳が今もポーランドのどこかに保管されているかもしれないという考え、私はその貴重な翻訳を発見しようと思立った。

そして、豊富な文献のなかから出来るだけヴァチカン、ポーランド、日本側の資料に限定して、マチェヨフスキーと日本人とのコンタクトに関する記載を探そうとしたのであるが、結局はこれと言った成果は得られなかった。

そこで、私はインターネットを利用することを思いついた。そして、私はまもなくポーランドの古い首都であるクラクフにあるヤギェウォ大学図書館のサイトに行き当たったのである。そこに提供されている蔵書の電子カタログに目を通して見ると、イメージ・スキヤナーで読み取られたのであろう手書きの図書カードを見つけたメモができた。それらのうちの一枚は天草コレジオ館で見つけたメモのものと同じ筆跡であるように思われた。そうだとすれば、同じ人物が百年ほど前にこれらのカードを書いたかも知れない。仮に、そうでなかったとしても、私の探し物は古い歴史をもったこのヤギェウォ大学にあるのではないかというあいまいな見通しを持つにいたった。そして、私は最後の手段としてインターネットでヤギェウォ大学図書館の電子メールのアドレスを探し出し、わずかな期待を胸に、短いメールを図書館宛に送ったのである。

その後およそ一年半のあいだヤギェウォ大学図書館の書庫部との文通がつづいた。ここでは、そのときポーランドから送られてきた十数通にもよる電子メールから数箇所の抜粋を以下に引用したい。

二〇〇〇年五月十九日

〈中略〉御質問の件ですが、私共ヤギェウォ大学図書館のコレクションには聖書の和訳がなく、ベルナルド・マチェヨフスキ司教の寄贈した本や、手書きの資料等もありません。あなたがこの図書館にあると思われる根拠を教えて下されば、もう一度調べさせていただきます。

クラクフ市ヤギェウォ大学図書館書庫部長

アンナ・コズローフスカ

二〇〇〇年六月二十七日

〈中略〉イタリヤの古書に挟まれていたメモに関する先生の御推察の確証を得る事が出来ました。クラクフ市のヤギェウォ大学図書館の一八四〇年の目録に、「特殊な項目」と題された章の一二八―一二九頁に次のように書いてありました。

「赤色の紙、銀板上のガラス・フレームの中の紙にラテン語と日本語でダビデ王の聖歌が二節書かれている。銀板の上の部分に数字とルーツク市の司教ベルナルド・マチェヨフスキーの紋

章が描かれている。銀板の裏側には、

*"Hanc Japponens Regnum A.D. MVLXXXV (sic) ad Greg
[orium] XIII P.M. Oratorum ad instant [iam] suam manu
et charact [ere] Romae scripsum tabellam regius tunc ad S.
Sed. Apo. Leg. Ill. Revm [us?] que DD. Bernardus Maciejowski
Episc. Luceor. post in Acad. Cracov. Biblioth. sui erga illum
magni amoris iudicium ad memoriam posteritatis extar (sic)
voluit A.D. MDIC."]*

という言葉が刻まれている。

最後の記録の日付は、一九〇六年七月二十五日となっております。その時、銀板は未だ私達の大学図書館にあったという事実を確認しています。それ以降、この銀板は図書館の目録に出て来ません。クラクフ市の他の図書館、書庫、博物館でも探したのですが、見つけることが出来ませんでした。いつか見つけたらと期待しておりますが……

クラクフ市ヤギェウォ大学図書館書庫部長

アンナ・コズローフスカ

二〇〇〇年八月七日

〈中略〉あなたのインスピレーションに従って、十六世紀のポーランドと日本とのコンタクトの事実を確認することが出来て、

嬉しく思っております。あなたのご依頼に応じて調査を行った方は当図書館の書庫部研究員で、リュツィーナ・ノーヴァック博士という方です。

このような貴重で、多分、美しいものが散逸してしまったのは大変残念ですが、ご存じのように、一九〇六年から二つの世界戦争が起りましたので、その間色々な事があったことは想像に難くありません。即ち、*habent sua fata libelli*⁽⁸⁾ということも知れません。しかし、聖歌の和訳が書いてある、ベルナルド・マチェヨフスキー司教の銀板は未だにどこかに埋もれていて、いつの日にか私たちの眼前に出てくることも有り得るのではないかと期待しております。

クラクフ市ヤギェウォ大学図書館書庫部長

アンナ・コズローフスカ

しかし、ポーランドからの連絡は途絶え、天正時代の銀板をいつか発見できるのではという私の期待は、段々と薄れていった。ところが一年が過ぎ去ったある日のこと、私は思いがけないメールを受け取った。そのメールに、

二〇〇一年、八月十三日

親愛なるエルマコーワ先生

去年の五・六月にエルマコーワ先生の依頼でベルナルド・マチェヨフスキー司教によってヤギェウォ大学図書館に寄贈された、ダビデ王の聖歌が書かれた書が収められた銀板に関して調査を行った者です。今年倉庫で例の目録作成を行った結果、この銀板は突然出てきて、四百年間以上じっと置かれたまま、その「発見者」を待っていたということが分かりました。もし今もその問題に御興味がありましたら、この展示品のカラー写真をお送り致します。しかしその前にこの展示品を綺麗にしなければなりません。

ヤギェウォ大学図書館書庫部長

リュツィーナ・ノーヴァック

そして、二ヶ月後に、ようやく、クラクフ市から写真が入った小包と下記の手紙を受け取った。

クラクフ市、二〇〇一年、十月三十日

親愛なるエルマコーワ先生

約束通りギフトとしてベルナルド・マチェヨフスキー司教の銀板の写真をお送り致します。

写真1…(銀板の表) 銀板の上部には、モノグラム：B [et-

nardus] M [aciejowski] E [piscopus] L [neorensis] と



写真1 銀板の表

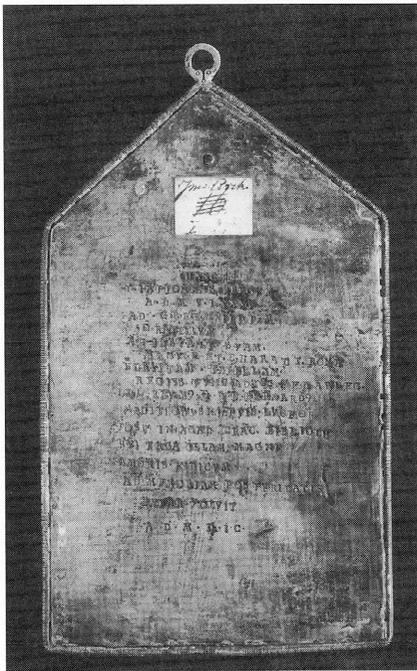


写真2 銀板の裏

ルーツク市の司教ベルナルド・マチェヨフスキーの紋章。
 その下の方に、ガラスの下の紙には聖歌の二節：最初はラテ
 ン語、その次に日本語で、

[Ps.92,1] ; Dominus regnavit, decorem indutus est, indutus
 est Dominus fortitudinem et praerexit se. ⁽²³⁾

[Ps.116, 1-2] ; Laudate dominum omnes gentes, laudate
 eum omnes populi ; quoniam confirmata est super nos
 misericordia eius et veritas domini manet in aeternum. ⁽²³⁾

写真2 : (銀板の裏)

銀板に貼り付けた小さい紙切れに書いてある : Imu Arch.16

1

【目録番号である】(ハッ印が記されて、その部分は削られてい
 る)。銀板に次の言葉が刻されている :

HANC

JAPONENSIS. REGVM

A.D.MVLXXXV

AD. GREG. XIII P.M.

ORATORVM

AD INSTANT. SVAM

MANU P [ROPRIA] ET CHARACT. ROMAE

SCRIPTAM TABELLAM

REGIVS TUNC AD S.SED.AP.LEG.

ILL.REVE. ^{MUS} Q.D.D.BERNARD ^{US}

MACEIOWSKI EPIS. LVGEOR.

POST IN ACAD. CRAC. BIBLIOTH

SVI ERGA ILLAM MAGNI

AMORIS INDICVM AD MEMORIAM POSTERITATIS

EXTAR [] VOLVIT

A. D. MDIC⁽⁸⁾ <中略>

ヤギェウォ大学図書館副館長

ズディースラブ・ペートシツク博士

その後、銀板の寸法を訊ねると次のとおりであった。全長は十
九・五センチメートル、長方形の部分の長さは十三・五センチメー
トル、その部分の幅は十一・五センチメートルである。

さて、使節の一人が書いた翻訳のテキストは、推測として、次の
ようである（ラテン文と順番が逆になっている）。

諸人提字主越

可奉誉諸人

天之御主

計給奈里

尚、読み方は恐らく、次のようになる。

もろびと（よ） ゼウスを

誉め奉るべし もろびと（よ）

天の御主（は）

計り給（う）なり

結びにかえて

しかし、この二つのダビデの聖歌の選択は誰によるものなのか、
そして実際に筆をとったのはどの人物なのかは不明である。今、私
にここのできるのは、この問題について考えるための参考になる一
つのエピソードを紹介しておくことである。ローマを立った使節た
ちは、ヴェネチアに立ち寄った際、大統領の謁見を賜っている。そ
しておよそ一週間の滞在の後ヴェネチアを出発する使節たちは、滞
在中に賜った「御慈悲」にたいしてヴェネチア大統領に宛てた感謝
状を送っているのである。この感謝状は日本語で書かれており、そ
の左にイタリア語による訳文が添えられている⁽⁹⁾。もちろん専門家に
よる筆跡鑑定を受けるまでは断定することはできないが、少なくとも
も素人の目には、この感謝状に記された日本文と、今回ヤギェウォ
大学図書館で発見された文書は同一の人物によって書かれたものに
みえる。

よく知られているように、この当時聖書のいくつかの部分は既に
日本のイエズス会によって訳されていた。しかし、その中には詩篇
はなかった。詩の前半のみ訳されていた点からすると、この聖歌の

選択をした人はマチェヨフスキーであったか、日本人であったかは、不明である。

一五八六年の三月から六月にかけて、彼らが出会ったのはいつのことであったか、今の時点では断定できない。また、マチェヨフスキーはわざわざ遣欧使節が宿泊していたイエズス会本部へと足を運んだのか、それともヴァチカンで偶然出会っただけなのかも不明のままである。

今のところ、全体として多くの事実は闇に包まれたままである事を認めざるをえない。だが、この古文書の発見をきっかけにして、遣欧使節のローマ滞在についてこれまで知られていなかった側面が明らかになること、そしてまた日波関係の歴史に新たな一頁が加わることを期待して本稿を閉じることにした⁽⁹⁾。

注

- (1) Енѣ Геррей. Истрия папства. Пер. с вѣр. О. В. Громова. Москва, Печублика, 1996, с. 211.
- (2) Я. Н. Мараш. Ватикан и католическая церковь в Белоруссии(1569-1795). Минск, Вышэйшаяшкола, 1971. с. 57.
- (3) 遣欧使節の渡航準備および旅程の詳細な研究は少なくないが、その中で権威ある一人の専門家の論文として次のものを挙げておく。
松田毅一『天正遣欧使節』講談社・東京、一九九九年。

(4) ロシア正教の見解では、グレゴリウス十三世は誘惑と騒乱をばらまく悪党とされていた。その理由としてよくあげられるのは彼の在位期間に行われた、「グレゴリウス暦」の採用である。ロシア正教の聖職者にとってこの改革は「邪教そのもの」であった。「もしローマ・カトリック教やその代表者である教皇が少しでも信仰を有していたのならば、陰陽暦の基盤となる永久不変な聖霊の教条を変えたりはしなかったに違いありません」と。グレゴリウス十三世のカレンダーの改革や「新信仰者ども」は数学者や天文学者からも批判をあげている。

(5) 松田毅一『天正遣欧使節』講談社・東京、一九九九年、四一一—四一七頁より引用。

(6) Boscaro, A. Sixteenth century European printed works on the first Japanese mission to Europe: a descriptive bibliography. Leiden, E.J. Brill, 1973.

(7) «Breve Relazione del Consistoro Pvblico, Dato agli Ambasciadori Giapponesi dalla buona memoria della Santità di Papa Greg. xiiij. in Roma, il di 23. di Marzo 1585. Con l'arriuo fatto in Pisa, & la riceuta fattagli da S. A. S. per tutto il suo felicissimo Stato. Et di nuouo baciati li piedi alla Santita di Nostro Signore Papa Sisto V. In Firenze, Dalle Scalue di Badia. 1585. Con licensia de' Superiori.»

(8) 例えはフランス語で出版されたものについては《Actes exhibez publiquement au consistoire par nostre Saint pere Gregoire Pape XIII. aus Ambassadeurs des Roi du Japon à Rome, le XXIII. Mars

長を務め、リトアニアやベラルーシの科学の誕生に立ち会ったといっ
ても過言ではない。彼の著作の中で『聖人伝』やヴィリノで一五
七七年に出版された『聖なる教会の統一をめぐる』(正式な書名
は『一人の羊飼いに従う聖なる教会や、ギリシアによる異端、そし
てギリシアに偏るロシアの諸民族への忠告の記』)という論文は特
によく知られている。

ヴィリノで生まれたスタニスラウス・ホシウス(一五〇四—七
九)は同様にカトリックの宗教家である。彼はトレント公会議の議
長を務め、カトリック教の世界で相当な権威を持った聖職者であ
った。一五六九年のポーランドとリトアニアの合併後まもなく、イ
ェズ会がヴィリノに拠点をおくことになったのも彼の活躍のおかげ
である。

(17) J. Sygański. *Listy ks. Piotra Skargi z 1566-1610*. Kraków,
1912, s.133-137. (Мараши Я.Н.Ватикан и католическая церковь в
Белоруссии (1569-1795). Минск, 《Вышэйшая школа》, 1971, с. 84, 74-75
用)

(18) ポーランドのみならず、当時のヨーロッパ全土のローマ・カト
リック教国で聖職者を任命する時に、国王がいわゆる推薦権を持ち
かなりの影響力を有していた。

(19) レオ・サビエハ(一五五七—一六三三)はリトアニア大公国の
大関白や指揮官であり、多くの地位を務めていた。彼は当時シム
ント三世に宛てた書簡に次のように書いている「ヴィリノの司教に
リトアニア人を任命してもらおうか、死ぬかの二つに一つだ」(Nor-
tautas Statkus. On Ethnicity of Magnates in the Grand Duchy of

Lithuania (1434-1582). "Artium Unio". Sociologu ir humanitaru
žurnalas. Vilnius, 1999, No.8を参照)興味深い事にサビエハ自身
はギリシア正教徒の家族に生まれ、一度プロテスタントへ改宗し
たが、人生の終末に近づいた時にさらにカトリック教徒へと改宗し
ている。また彼は東方婦一教会の創立に参加した。

(20) ヤギェウォ大学に保存されている数十冊のマチェヨフス
キーの演説や説教の中で、*List pasterski*のラテン語版は*Dystola*
Pastoralis, *Bernardus Miserationes Divina*, tit. S. Ioannis ante
Portam Latinam I.R.E.Presbiter Cardinalis, *Maciejowski nun-*
ciatus, *Archiepiscopus Gnesensis*, *Legatus Natus Regni*
Poloniae, *Primas et Primus Princepi etc.*の版はマチェヨフスキ
の生存中に出版されている。また、この説教の及ぼした影響のひ
とごとく、ポーランドやリトアニアにおける施療院の増加を挙げ
ることもできる。

(21) Grzegorz Brożek. *Przed kanonizacją b. Kingi. W poczcie b.*
gości awionych. - Garnowski gość niedzielny. 23.08.1998, numer
34/257.

(22) その結婚式はマチェヨフスキにとっては滑稽で非常に不愉
快な側面も持っていたとされる。儀礼の描写は例えば名前がマチェ
ヨフスキと記される次の研究を参照。

「Н. И. Костомаров 《Русская история в жизнеописаниях ее главнейших
дейтелей》。また、ポーランドの教会史学者や伝記学者の研究も豊
富である。

(23) A Book of Old Testament illustrations of the middle of the

- thirteenth century: sent by Cardinal Bernard Maciejowski to Shah Abbas the Great, king of Persia, now in the Pierpont Morgan Library at New York / described by Sydney C. Cockerell; with an introd. by Montague Rhodes James and notes on the armour by Charles J. Froukes. Cambridge [Cambridgeshire]: Printed by W. Lewis at the University Press for the Roxburgh Club, 1927.
- (24) 例えは説教のポーランド語訳文(一九九九年クラクフでマンスキー枢機卿がローマ教皇の代わりに読んだもの)《Kraków, 15 czerwca 1999 r. *Homilia Jana Pawła II wygłoszona przez kard. Macharskiego*》を参照。
- (25) 最新の研究(例えは)「Шевцово. В. Деятели церкви культурно-политического пространства Речи Посполитой в 1587-1592 гг. Издательство «Белый свет» и Альманах «Геополитика». Минск, 1996. (初版は - Вильнюс, 1994年が参照)。
- (26) 例えは府主教マッカーリーは「マチェヨフスキの穩健な見解に言及して」である。Макарий(Бугаков)Митрополит Московский и Коломенский.История русской церкви. Кн. 5. 6. Издательство Синодально-Патриаршего Валаамского монастыря, М., 1996. (初版は1857-1883)° №26Б.Н.Флора,《Подготовка Врестской унии и политика духовной и светской власти Речи Посполитой》-《Брестская уния 1596 г. обществено-политическая борьба на Украине и в Белоруссии в конце XVI-начале XVIII в.ч.1.Москва,Индрик,Библиотека Института славяноведения и балканистики, 1996, с.175.》を同く参照が参照。
- (27) Уния в документах. Минск, Лучи Софии, 1997, с. 138.
- (28) シクストゥス五世やパウルス五世宛ての「ラテン語で書かれた書簡はヴァチカンの書庫で発見されており、次の書物に転載されています° *Vetera Monumenta Poloniae et Lithuaniae. Gentiumque Finitimarum/Historiam Illustrantia/ Maximam Partem Nondum Edita ex Tabulariis Vaticanis/ Deprompta Collecta ac Serie Chronologica Disposita ab Augustino Theiner. Tomus Tertius. 1585-1596. Reproductio phototypica editio 1860-1864. Osnabrück, Otto Zeller, 1969, p. 21-22, 41-42, 89-90, 288, 294-295.*
- (29) 『日本遣欧使者記』木下幸太郎訳 / Raccolte da Guido Gualtieri. Relazioni della venuta degli ambasciatori Giaponesi a Roma fino alla partita di Lisbona 東京岩波書店 一九三三°
- (30) これは「一五八五年に教皇グレゴリウス十三世のもとへ派遣された日本人の大使の手によって「日本語で」又はローマ字で書かれた板なり。「最初は」ポーランド国王の使者「ルーツク市の司教ヘルナルド・マチェヨフスキ博士」が持っておられた」ものであり、その後「司教の」大いなる慈悲の印として、または子孫の為の記念品として、司教の意思に依じて「クラクフ市のアカデミーの図書館へ一五九九年に寄贈された。」
- (31) ラテン語の諺で「本にも夫々の運命が存在する」°
- (32) ルーツク司教ヘルナルド・マチェヨフスキ°
- (33) 詩篇「九十三」°。主こそ王。威厳を衣とし、力を衣とし、身に帯びられる。御座はいにしえより固く据えられ、あなたはとこしえの昔からいます。

(34) 詩篇、百十七、一、二。すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまことはとこしえにわたしたちを超えて力強い。(聖書 新共同訳 日本聖書協会 東京 一九九
九。

(35) ラテン語のテキストの翻訳をコズローフスカ氏の手紙で参照。

(36) この感謝状は様々な資料に転載され、上述の松田毅一の研究(二七七頁)にも含まれている。原文はヴァチカン書庫に保存されている。

(37) 様々な事柄について御教示頂いた先生方、岡本崇男、長志珠絵、中村喜和、畠山雄三郎、松川ソフィアと松川克彦に謝意を表す。